埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）	日本・アジア研究専攻	学籍番号	07CS004
氏名　小倉　聖	ローマ字　OGURA Sei	国籍（留学生）	

修士学位論文名	中国戦国時代における「刑」「徳」―軍事思想の中での意味―		
提出年月日	2010 年 1 月 12 日	指導教員	関口順
体裁（　　）	70 頁（1 頁文字数 1440 字）	言語	日本語
別冊添付資料等			
キーワード	中国古代、刑、徳、軍事、出土文献		

「徳」は中国古代から王の地位の根拠・神への奉仕と関っていた。『春秋左氏傳』においては、「徳」は恩恵を施すこと、また「徳」による中国の「安撫」であるとされ、また「徳」と並べられている「刑」は邪を正すこと、「刑」による四夷の「威圧」であるとされている。

「刑」「徳」という概念は征伐・軍事と関わることが多く、「刑」「徳」の概念を理解するために軍事においてどのように捉えられていたかを明らかにすることは、必須と思われる。

今回軍事に限定した理由は、軍事行動という極限状態において人がどのように考えるのかということに考察を加えるのは、人の思考を理解する一助になると考えたからである。

調査・考察の方法としては『孟子』『荀子』『管子』『孫子』『呉子』『尉繚子』『孫 臏兵法』『六韜』『司馬法』『曹沫之陳』に「刑」「徳」が軍事に使われている例が見えているので、これらを取り上げる。その上で「刑」「徳」を施し・与える主体であろう「将」について考察を加える。さらに「将」を登用する際の人材登用のありかたを調べるために、「尚賢」思想及び「将」の資質について考えた。最後に人材登用を行う側の「王」「君主」について考えた。

考察を加えた結果、戦国時代の軍事における「刑」「徳」は、「王」「君主」「将」が「民」や下位の者に気配り・配慮をして忠誠心を育もうとするにつれ、より「民」を大事に扱う方向に用いられる概念であることが分かった。

また兵書系以外の書で「刑」「徳」を軍事との関わりで述べている場合、「王」「覇」の概念と関連付けているが、兵書系の書にはこのような記述は見えない。兵書系の書を書いた思想家達にとっては「王」「覇」概念に興味を持てず、兵法とは関係の無い重要性の低い概念としか考えられなかったのであろう。